専修人文論集 111号
（2022）001-029

世界英語における２人称代名詞の多様性と変化

―eWAVE を活用した英語史的な思考法への誘い―

菊　地　翔　太*

１．はじめに

近年，英米の二大変種（イギリス英語・アメリカ英語）に端を発し，独自色を強めながら世界各地で発達している英語変種について学術的な関心が高まっている。英語の多様性を尊重する態度は言語学の諸分野において醸成されてきているが，このような傾向は，本来は単数でのみ用いられてきた English の複数形 Englishes の使用が広く認められ，World Englishes（世界英語）という用語が学界を席巻しているという事実に反映されている。世界英語は学際的な研究領域であるが，英語史と社会言語学などの関連分野においては，各英語変種の歴史的な形成過程や言語的な特徴を解明し記述することがとりわけ重要な課題となっている。その成果は相次いで出版されている世界英語の学術書（e.g. Filppula et al.（2017）, Nelson et al.（2020）, Kirkpatrick（2021））で報告されている。世界英語の研究を取り巻く環境は日進月歩で整備されてきており，無料で使えるデータベースやコーパスの充実に伴い，多くの研究者に門戸が開かれてきている。

このような潮流は日本の英語史研究にも波及しており，多くの研究者の間に世界英語という視点の重要性が共有されている。2016年には，世界英

＊専修大学文学部講師

語を射程に入れた画期的な英語史の概説書である唐澤（2016）『世界の英語ができるまで』が上梓された。世界英語に関連する講演や講習会も盛んに行われている。慶應義塾大学の堀田隆一氏は，現在，朝日カルチャーセンター新宿教室にて全4回の講座「英語の歴史と世界英語」を開講中であり，英語の現在と未来を読み解くうえで世界英語という観点がいかに重要であるかを精力的に発信している。専修大学では，今年6月に開催された文学部英語英米文学科主催の学術講演会にて，青山学院大学の寺澤盾氏が「She don't care ってあり？―現代英語の多様性と変化」という題目で講演を行った。ブリテン諸島における英語変種に見られる形態統語的な特徴についての説明を出発点とし，英米の標準英語変種の差異や現在進行中の変化，インド英語に見られる非標準用法等に言及し，英語は昔から現在にいたるまで一枚岩ではなく多様であり，今後も変化していくということを実証的に論じた講演であった。筆者は，世界英語を調査するリソースの普及に貢献するために，世界英語を収録したコーパスである The Corpus of Global Web-Based English（GloWbE）の使い方について学内外で講習を行ってきた（2020年 2020駒場英語史研究会，2021年 khelf-conference-2021（慶應英語史フォーラム））。

本稿は，世界英語の比較ができるインターネット上のデータベースである the electronic World Atlas of Varieties of English（eWAVE）を活用することで，世界英語の2人称代名詞の多様性と変化についてどのような知見が得られるかを報告すると同時に，eWAVE の可能性と限界について論じる。2人称代名詞は世界英語を通時的な視座から考察する際にとりわけ有用な指標である。次節で詳しく見るように，2人称代名詞の体系には後期中英語期（1300–1500）から初期近代英語期（1500–1700）にかけて劇的な変化が起こったと考えられているが，その変化が終わりを迎えていた頃に，植民地政策により英語の世界進出が本格的に始まった。また，その変化は，標準英語に連なるロンドンを中心とするイングランド南部の英語に

おいて顕著に進行したが，ブリテン諸島全土に一律に影響を与えたものではなかった。このような事実を鑑みると，世界に見られる各英語変種における２人称代名詞の共時的な使用状況は，その地域への植民の時期や入植者の出身地域と関連付けて理解することが重要であるといえる。eWAVE はまさにこのような英語史的な思考法を養ってくれるデータベースであることを示す。

本稿の構成は以下の通りである。まず，２節では，２人称代名詞の歴史的変遷について基本事項を整理する。３節では，eWAVE の基本的な使い方や特長について解説した後，eWAVE を活用しながら世界英語の２人称代名詞について考察する。４節では，本稿のまとめを行う。

２．２人称代名詞の歴史的変遷

人称代名詞の体系には英語の歴史を通じて多くの変革が起こった。現代英語における人称代名詞の変化を議論している Krauthamer（2021）の著書のタイトル *The Great Pronoun Shift* が示唆しているように，人称代名詞の体系はこれからも劇的な変化が起こりうる興味深い領域であり，特に，標準英語で広く市民権を得つつある３人称単数形としての they の使用に関心が集まっている。約1500年に及ぶ英語の歴史を振り返ってみると，古ノルド語起源の３人称複数形 they の導入，未だに語源について活発な議論が続いている she の使用開始等，特に大きな変化は中英語期（1100–1500）に集中している。２人称代名詞についても例外ではない。表１が示している通り，伝統的な英語の人称代名詞の体系（古英語（450–1100）から初期中英語（1100–1300））では，２人称の単数と複数が形態的に区別されており，単数には thou（古英語 þū）が，複数には ye（古英語 gē）が使われていた[1]。この体系が揺らぎを見せ始めるのは，後期中英語期（1300–1500）に，おそらくフランス語やラテン語の影響で，ye を２人称単数形に使う

用法が発達し始めてからである。数によって形態を使い分けるというシステムに，相手との関係という社会言語学的・語用論的な基準がもたらされることになったのである。ye は自分よりも社会的・心理的に高く位置づけられる人に敬意を表す敬称として，thou は自分と同等あるいは自分よりも下位の人間への親称として，使い分けられるようになった。相手との関係や感情に変化が生じると，敬称の ye と親称の thou の選択にも変化が生じた[2]。初期近代英語期（1500–1700）が終わりを迎える頃には，相手との関係や感情にかかわらず，単数には敬称形を使用することが一般化し，thou の存在は風前の灯火となっていた。

また，初期近代英語期には，主格の ye と目的格の you は，弱形では発音に区別がつきにくいこともあり，しばしば格の区別なく用いられることがあったが，次第にどちらの機能においても目的格出身の you が ye を駆逐することとなった[3]。その結果，２人称代名詞の体系は，他言語から取り入れた敬称と親称という基準を失っただけでなく，thou（主格単数），thee（目的格単数），ye（主格複数）の衰退に伴い you に一本化されたことで，単数と複数，主格と目的格の形態的な区別も喪失してしまった。

表１．伝統的な２人称代名詞の体系

	単数	複数
主格	thou	ye
目的格	thee	you

以上が英語史の概説書に一般的に見られる２人称代名詞の変遷史であるが，これは標準英語，より狭義に言えば，‘formal written standard English English’（Wales 2004）を対象とした記述である[4]。ブリテン諸島内のヴァナキュラー（地域口語）に目を向ければ，標準英語では失われてしまった伝統的な用法が保存されている変種もあれば，新しい用法を発達させている変種もあり，２人称代名詞は現在に至るまで多様性と変化の様相を呈している[5]。世界英語の観点から見て重要な外面史上の出来事は，標準英語

において現在の２人称代名詞の体系が形成されつつあった頃に，イギリスが本格的に植民地政策を開始し，北米大陸やカリブ海地域（17世紀初頭以降），アジアやアフリカ（18世紀末以降）に進出しながら，各地に世界英語の種を蒔いていったということである。移植された種は雑多であり必ずしも標準的なものとは限らなかったことに加えて，その後，その土地の栄養を吸って独自色を強めながら成長していったことから，英語は世界レベルで多様化していき，２人称代名詞の体系にも多様性が生じることになった。

eWAVE を用いて世界規模の調査を行う前に，２人称代名詞の共時的な使用状況について前提知識を確認しておきたい。標準化の影響を大きく受けていないヴァナキュラーでは，伝統的な形態が保存されていることがあり，衰退の傾向を示してはいるものの，イングランド北部や西部で thou と thee が，ノーサンバランドで ye が聞かれる（Trudgill 1999: 92–94）。thou と thee は，クエーカー教徒の間で比較的最近まで使われていたことや，現在でも古語法として聖書などの翻訳や宗教言語で使われることがあることも指摘されている（寺澤 2008: 116–117）。一方で，古英語由来の２人称単数が廃用になり，you が単複で地位を確立している英語変種においては，単複を形態的に区別する従来の体系が機能不全に陥っているために，体系の復元を目指して新たな２人称複数形が生み出されている（e.g. you guys，you all，you ones）[6]。これは単複を区別する１人称と３人称との整合性を図り，より安定した人称代名詞の体系を持ちたいという欲求の現れといえる（寺澤 2008: 126）。後に詳しく見るが，このような発達はヴァナキュラーにおいて世界規模で起こっている現象であり，世界英語や（脱）標準化（(de)standardization）という問題を考える上で重要な視点を提供する[7]。

ここで，世界英語の諸変種の形成に少なからぬ影響を与えたと考えられているアイルランド英語の事例を取り上げよう[8]。アイルランド英語では

17世紀半ばには thou が衰退していたと考えられているが（Hickey 2003: 348），単数の tú と複数の sibh を区別するアイルランド語と同様に 2 人称の単複を形態的に区別するために，英語に既に存在していた要素を巧みに活用して独自の体系（表 2 ）が形成された。you を単数で用いる一方で，ye を複数形専属の代名詞として確立したり，yous(e) やその変異形の yez, yiz 等の新たな形態を発達させたりしたと言われている。yous(e) は単数の you に名詞の複数形を作る生産的な語尾である -s /z/を付与して作られたと考えられている。yez はいわば二重複数形（cf. children）のようなもので，上述の複数形の ye に生産的な複数形語尾の -s /z/を付加した形態である。他のどの変種にも言えることだが，アイルランド英語には地域差があることが指摘されており，ye は南部，yous(e) は北部で典型的に聞かれる。

表 2．アイルランド英語における人称代名詞の体系

	単数	複数
1 人称	I	we
2 人称	you[9]	ye，yous(e)，yez，yiz
3 人称	he/she/it	they

3．eWAVE から学ぶ世界英語の 2 人称代名詞

3.1　eWAVE の紹介

本稿では，世界英語について洞察を得られるオンライン上のデータベースである the electronic World Atlas of Varieties of English（eWAVE）を用いて，世界英語に見られる 2 人称代名詞の多様性と変化について考察する。eWAVE は，77の英語変種（ヴァナキュラー）の形態統語的な特徴を提供するデータベースである。統一的な基準から各変種の専門家が情報を提供しており，学術的な信頼性は極めて高い水準にある。英語史や社会言

語学のみならず，言語類型論，第二言語習得等，言語学の様々な領域の研究者に資するリソースであり，学際的な研究を促してくれる。定期的に改訂がなされ，2022年８月現在，第３版（eWAVE 3.0）が公開されている。

収録されている77の英語変種については表３を参照されたい。変種の種類は，traditional L1（伝統的な母語としての英語），high-contact L1（接触の多い地域で話されている母語としての英語），indigenized L2（土着化した第二言語としての英語），English-based Pidgins（英語をベースとしたピジン），English-based Creoles（英語をベースとしたクレオール）に大別されている。また，変種の地理的な分布はブリテン諸島から太平洋地域に至るまで広範囲に及んでいる。

形態統語的な特徴は，主に非標準的な英語変種に見られるものを中心に235項目扱われており，12種類のカテゴリー（代名詞，名詞句，時制と相，助動詞，動詞の形態，否定，一致，関係節，補文，副詞節，副詞・前置詞，談話構成と語順）に分類されている。ある特定の変種の形態統語的なプロフィールを俯瞰したり，形態統語的な特徴毎にそれぞれの変種の使用状況を横断的に比較したりすることが可能である（それぞれトップページから「Varieties」と「Features」をクリックすると表示される）。

eWAVE の最大の特長は，各形態統語的な特徴の世界的な分布とその頻度に関する情報をインタラクティブな地図上に視覚的に示す機能であろう。各特徴について変種ごとに評価が与えられており，ある変種においてその特徴の存在が確認されている場合には，その頻度に応じて，A（feature is pervasive or obligatory），B（feature is neither pervasive nor extremely rare），C（feature exists, but is extremely rare）の中から評価が与えられる。その特徴の不在が確認されている場合には，D（attested absence of feature）と評価される。その変種の構造上評価することができない場合やその特徴についての情報が手に入らない場合には，それぞれ X（feature is not applicable（given the structural make-up of the variety/P/C））と？（no in-

表3．eWAVEに収録されている英語変種（eWAVEのIntroductionのページの表を基に作成）

	L1（33）		○Indigenized L2（18）	▽Pidgins（7）&△Creoles（19）
	□Traditional L1（10）	◇High-contact L1（23）		
British Isles（12）：	Orkney and Shetland E, North of England, SW of England, SE of England, East Anglia, Scottish E	Irish E, Welsh E, Manx E, Channel Islands E, Maltese E		British Creole
Africa（17）：		Liberian Settler E, White South African E, White Zimbabwean E	Ghanaian E, Nigerian E, Cameroon E, Kenyan E, Tanzanian E, Ugandan E, Black South African E, Indian South African E, Cape Flats E	Ghanaian Pidgin, Nigerian Pidgin, Cameroon Pidgin, Krio, Vernacular Liberian E
South Atlantic（3）		St. Helena E, Tristan da Cunha E, Falkland Islands E		
America（10）：	Newfoundland E, Appalachian E, Ozark E, Southeast American Enclave dialects	Colloquial American E, Urban African American Vernacular E, Rural African American Vernacular E, Earlier African American Vernacular E	Chicano E	Gullah
Caribbean（13）：		Bahamian E	Jamaican E	Jamaican C, Bahamian C, Barbadian C（Bajan）, Belizean C, Trinidadian C, Eastern Maroon C, Sranan, Saramaccan, Guyanese C, San Andr ? s C, Vincentian C
South and Southeast Asia（8）：		Colloquial Singapore E, Philippine E	Indian E, Pakistan E, Sri Lanka E, Hong Kong E, Malaysian E	Butler E
Australia（6）：	Aboriginal E, Australian E, Australian Vernacular, Croker Island English E			Torres Strait C, Roper River C（Kriol）
Pacific（8）：		New Zealand E	Colloquial Fiji E, Acrolectal Fiji E,	Hawaiian C, Bislama, Norf'k, Palmerston E, Tok Pisin

formation on feature is available）という評価が付与される。eWAVE の地図は，評価に応じて変種のアイコンを色分けして表示するという直感的にわかりやすいインターフェースを採用しており，アイコンの色が濃いほどその特徴が高頻度で聞かれるということを示している（表４を参照）。また，アイコンの形状は英語変種の種類について視覚的に情報を与えている（例えば，□は traditional L1を示す。表３を参照）。発展的な検索も可能であり，評価毎に英語変種を表示したり，英語変種の種類別に表示したりすることも可能である（それぞれ「Legend」と「Type」タブをクリックすると表示される）[10]。さらに，地図上のアイコンをクリックするとその英語変種の簡潔な歴史社会言語学的プロフィールを確認できるようになっている。eWAVE の土台となっている Kortmann and Lunkenheimer（eds.）（2012）*The Mouton World Atlas of Variation in English*（WAVE）を参照すると，より詳細な情報が得られる。

3.2　２人称代名詞の地理的な分布と頻度

eWAVE では，代名詞に関する情報は F１から F47に整理されており，２人称代名詞についての情報は F34（Forms or phrases for the second person plural pronoun other than you）と F35（Forms or phrases for the second person singular pronoun other than you）にまとめられている。図１と図２はそれぞれ you 以外の２人称単数形と複数形を使うという特徴の地理的な分布と頻度を示した地図である。表４は，各特徴について評価毎に変種の数を示している。

これらの地図を比較すると，you 以外の２人称単数形と複数形の使用という形態的な現象は大きく異なった地理的分布を示していることが視覚的に理解できる。you 以外の単数形の使用は地理的な分布に偏りがあり（図１），eWAVE に収録されている英語変種の21%（16/77）にしか見られない。eWAVE で扱われている235項目の形態統語的な特徴の中で，attestation

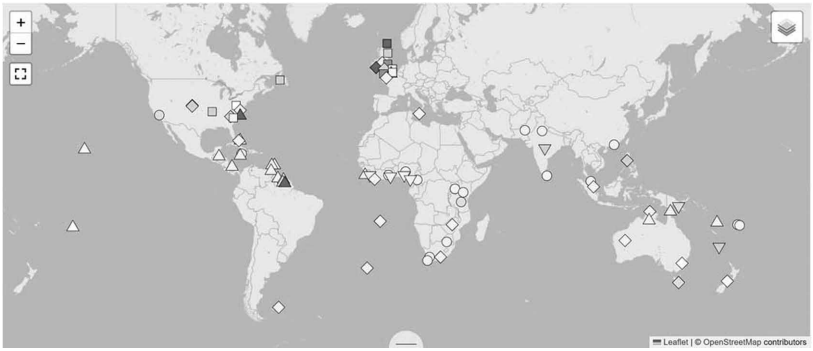

図１．2人称単数に you 以外を使うという特徴に基づく英語変種の地図（F35）

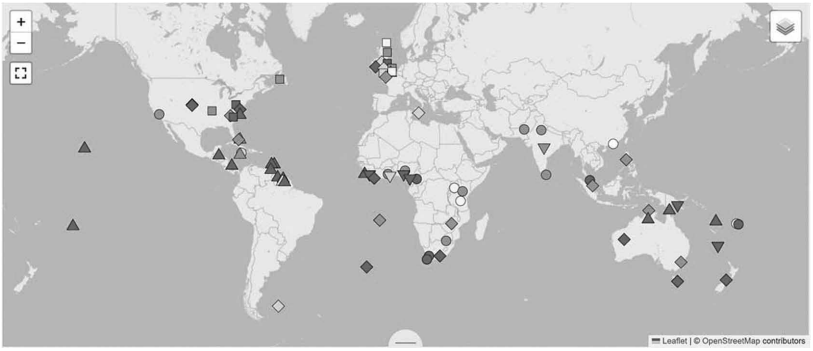

図２．２人称複数に you 以外を使うという特徴に基づく英語変種の地図（F34）

表４．F35と F34の評価

色	評価	F35 （２人称単数）	F34 （２人称複数）
●	A–feature is pervasive or obligatory	4	38
●	B–feature is neither pervasive nor extremely rare	3	25
●	C–feature exists, but is extremely rare	9	7
○	D–attested absence of feature	53	6
○	X–feature is not applicable（given the structural make-up of the variety/P/C）	4	0
○	？–no information on feature is available	4	1

rate（ある特徴が観察される変種の割合を，収録されている全変種を分母として算出したもの）は169番目に位置し，世界英語の特徴としては非常に珍しい部類に属していることがわかる。対照的に，91%（70/77）の英語変種に見られる you 以外の２人称複数形は，世界の多くの英語変種に共通する形態的な特徴の一つであるといえる（図２）。この特徴の attestation rate は，F229の「Yes/No 疑問文において主語と（助）動詞の倒置が行われない」という現象（92%）に次いで全体２位である[11]。

二つの関連する特徴の頻度と地理的な分布の違いを理解するためには，英語史の視点が役に立つ。前節で概観を示した２人称代名詞の変遷と世界各地への英語の離散の時期（17世紀初頭以降）を考慮に入れると，eWAVE の利用者は，世界英語の２人称代名詞に関する専門的な論文を読んでいなくとも，以下のような仮説を立てることができるだろう。現在，少数の変種で聞かれる you 以外の２人称単数形は，伝統的な thou や ye の生き残りであり，ブリテン諸島において一部の保守的なヴァナキュラーに残存している。世界の多くの地域では，それらの形態の衰退が最終段階に達していた，あるいは完了していた変種を携えた人々が中心となって植民が行われ，入植の段階において既に伝統的な単数形が生き延びる機会は極めて限られていた。多くの植民地には，you が単数形の地位を占有している変種がもたらされ，２人称でのみ数の形態上の区別を欠いている人称代名詞体系を引き継いだ英語変種が発達することになった。単複を区別する必要性に駆られ，多くの英語変種では，you を単数形として専ら用いる一方で，単数と区別するためにより明示的な複数形を作り出していった。

eWAVE が提供する変種に関する情報や用例を見ると，このような仮説の裏付けが取れる。eWAVE の利用者は，用例の一覧を一瞥するだけでも，世界に多様な２人称代名詞が存在していることはすぐに把握できる。しかし，これらの用例の通時的・共時的な側面を解き明かすためには，歴史的な連続性を考えてみたり，各英語変種が互いに影響を与えることなく偶然

に同じ形態を創造したという可能性を考えてみたり，各変種の成立の背景（外面史）を考慮に入れながら複合的な視点から用例を精査する必要が生じる[12]。eWAVE は全ての変種の用例を載せているわけではないので，用例の代表性の問題や分布に偏りがある可能性には注意しなければいけないが，世界英語の全体的な傾向とその背後にあるメカニズムについて，英語史的な視点から考察する力を涵養する貴重な機会を与えてくれる。

3.3　2 人称単数形

まず，2 人称単数形に着目したい。eWAVE における用例の表示画面を写した図 3 からわかるように，2 人称単数形の用例は15点提供されている（付録の表 1 も参照）。由緒ある thou やその関連形と見られる用例が報告されているのは，英語発祥の地であるブリテン諸島に分布している L 1 の変種のみである。イングランド北部の方言（B 評価）においては，目的格の thee の用例が挙げられている。ウェールズ英語（C 評価）については，thou，thee，ye が主格として，thee が目的格として使われるという情報が与えられており，スコットランド英語（C 評価）の用例は ee や du が使われることを示している。伝統的な ye や thee と関連しているとされる ee は，北東部の方言でのみ聞かれるという（Smith 2012: 22）。スコットランドの北部諸島で話されているオークニー・シェトランド英語（A 評価）では，du や thoo が使われるという情報が提供されている。

次にいくつかの変種で見られる ye という形態について考察したい。ブリテン諸島から離れて発達した英語変種の用例を見ると，歴史的な連続性への気づきを促すものもある。カナダの東海岸に位置するニューファンドランドの歴史を紐解けば，そこで聞かれる ye がブリテン諸島から引き継がれた化石的な用法である可能性に気がつくだろう。eWAVE は各変種の概略を記しているが，traditional L1 に分類されているニューファンドランド英語（C 評価）については以下のような解説がなされている。

Values　Examples

Showing 1 to 15 of 15 entries　← Previous　1　Next →

Id	Primary text	Variety	Variety Type
Search	Search	Search	--any--
811	*Yu and yuu*	Norfolk Island/ Pitcairn English	English-based Pidgins
979	*thee/thou (SUBJ) / thee (OBJ)*	Welsh English	High-contact L1 varieties
980	*thee (SUBJ/OBJ) / yee (SUBJ)*	Welsh English	High-contact L1 varieties
1169	*Put un where ye can see 'im*	English dialects in the Southwest of England	Traditional L1 varieties
1244	*I tell ye hit aint right what I seen.*	Earlier African American Vernacular English	High-contact L1 varieties
1565	*I ná a baafu wata moo.*	Eastern Maroon Creole	English-based Creoles
1566	*Pe i e [ye] go uku, na ape?*	Eastern Maroon Creole	English-based Creoles
1567	*Na yu abi bigi ain fu mi.*	Eastern Maroon Creole	English-based Creoles
1997	*That's when most of them want thee*	English dialects in the North of England	Traditional L1 varieties
2056	*"Father" he said "what ye tryin to do?"*	Newfoundland English	Traditional L1 varieties
2164	*ye*	Gullah	English-based Creoles
3963	*Sure it's no good to ye in England*	Irish English	High-contact L1 varieties
4022	*Div ee ken this quine?*	Scottish English	Traditional L1 varieties
4023	*Du's here, du's alive!*	Scottish English	Traditional L1 varieties
4091	*Du/thoo*	Orkney and Shetland English	Traditional L1 varieties

図 3．eWAVE における F35の用例の表示画面

Newfoundland was one of the earliest British-settled areas of the New World, with continuous settlement from the beginning of the 17th century. Until the 20th century, settlers in Newfoundland were drawn almost exclusively from two principal geographical sources, the southwest counties of England and the southeast counties of Ireland. From a linguistic perspective, geographical, socioeconomic and demographic factors have had a conservative effect. At present, there is a considerable range of dialect diversity within Newfoundland, which correlates with both social and regional factors, as well as speech register.

この記述から，入植の時期，入植者の出身地，変種の言語的特徴について概要を掴むことができる。ニューファンドランドにおける ye について考察する際に特に重要なのは，初期の植民地の一つであったことや，入植者の多くがイングランド南西部とアイルランド南東部出身であったことに加えて，そこで発達した英語変種が保守的な特徴を持つという事実である。このような見地から eWAVE が提供する用例を改めて眺めてみると，まさ

にイングランド南西部の方言（B 評価）とアイルランド英語（A 評価）の用例に 2 人称単数の ye が含まれていることに気がつき，ニューファンドランド英語の ye との血縁関係を深く考えさせられる。eWAVE の情報のみではわからないことだが，イングランド南西部からの移民を中心に発展した地域では，伝統的な 2 人称単数形である thou を起源に持つ形態（i.e. dee, ’ee）も聞かれるという（Clarke 2010: 88–89）。

しかし，各変種からひとつずつ提供されている用例を見ただけでは，これらの地域で報告されている ye の遺伝関係について確かなことは言えないだろう。ye には，ya /jə/と関連する比較的最近になって発達した you の弱形（ye /jə/）という可能性がある点に注意したい。これは伝統的な ye /jiː/とは発音上区別される。遺伝関係を立証するためには，それぞれの地域で見られる ye がニューファンドランドへの入植時まで切れ目なく遡れるのかどうか，通時的な視座から実証的な証拠に基づいて検討することが肝要だろう[13]。

このような問題はあるものの，その他の変種に見られる ye についてもその含意するところについて考えてみたい。アメリカのサウスカロライナ州やジョージア州の沿岸部で話されているガラ語（A 評価）で聞かれる ye はどのように解釈すればよいだろうか。ブリテン諸島から海を渡ってもたらされた慣習の名残なのだろうか。ガラ語が奴隷貿易に端を発し，多言語の混交の結果生じたクレオールであることを鑑みると，ブリテン諸島の英語変種との遺伝関係を考えるよりも，you の弱形として独自に発達した形態であると考えた方が理にかなっているだろう[14]。ピジンやクレオールでは，ye に加えて，南太平洋のノーフォーク島・ピトケアン島の英語（C 評価）に見られるように，yu や yuu[15] 等の you の異形が例証される。

初期の AAVE（黒人英語）（C 評価）に見られるという ye の解釈は，この変種をどのように捉えるかに依存するかもしれない。初期の AAVE は eWAVE では high-contact L1 に分類されている。しかし，AAVE の形成過

程と類型については諸家の間で意見が分かれており，英語との遺伝関係を強調する仮説（the Anglicist hypothesis）とクレオールを起源とする仮説（the creolist hypothesis）の間の論争が引き合いに出される[16]。前者の立場から見れば，初期の AAVE に見られる ye はブリテン諸島から引き継がれたものと主張できるかもしれないし，後者の立場からは後発的に誕生した弱形の ye と分析されるものかもしれない[17]。

eWAVE では，用例が限られており，音声的な情報も与えられていないため[18]，本稿では ye の問題についてはこれ以上立ち入らない。変種間の連続性や独自路線での発達を証明するためには，実際の言語資料に基づく質的な分析が求められるだろう[19]。しかし，このような気づきが得られるという点こそが eWAVE の持つ学術的な価値の一つである。

最後に，多くの用例が報告されている，スリナムやフランス領ギニアで話されている東マルーンクレオール（A 評価）における 2 人称単数形の使用状況について考えたい。以下，用例 3 点を標準英語訳と共に示す。標準英語から大きく逸脱した特徴を示しており，専門的な知識を有していなければ，どの語が 2 人称単数の代名詞として使われているのかさえ判別することは難しいだろう。

I ná a baafu wata moo.	‘You do not have meat sauce any more.’
Pe i e [ye] go uku, na ape?	‘Where are you going to fish, is it over there?’
Na yu abi bigi ain fu mi.	‘It is YOU who is jealous of me.’

Migge（2012: 281）によると，2 人称単数には英語由来の i を，複数にはおそらくオランダ語由来である u を使う体系が発達しているという[20]。強調構文では，三番目の用例に見られるように，単数の強意形として英語由来の yu が用いられる。興味深いことに，標準英語では失われてしまっ

た複数形を単数の相手に対して使う敬称の用法が発達しているということも報告されている。

3.4　2人称複数形

次に，世界的に広く分布しているyou以外の2人称複数形についてより詳しく見ていきたい。図2の地図で見たように，多くの英語変種において新たな2人称複数形を導入して単複を区別する体系を復元しようとする力が普遍的に作用しているようだが，eWAVEが提供する65点に及ぶ用例を一望すると，使用される形態には変種間のヴァリエーションが大きいことがわかる（付録の表2を参照）。地理的な分布に変種間の影響関係を想定できるような形態もあれば，相互に影響を与えることなく諸変種で独自に発達した可能性を喚起するような形態があることにも気がつくだろう。

以下，代表的な形態について考察を加えたい。eWAVEの用例の中には，yous(e) のように変種間の連続性を指摘することが可能な形態も存在する。世界に見られるyous(e) の端緒はアイルランド英語にあると考えられている（Hickey 2003; 2007）。19世紀のアイルランド大飢饉（1845–1848）以前には，この形態の使用は既にアイルランド英語の顕著な特徴となっており，アイルランドからの移民に伴い世界に拡散され，各地に根付いていった[21]。Hickey（2003）はyous(e) のアイルランド発祥説を裏付ける証拠として，初期近代英語のコーパス（The Corpus of Early English Correspondence（CEEC）とthe Helsinki Corpus（初期近代英語部分））に用例が見られないことや，イングランドやスコットランドではアイルランドの影響が強い地域（e.g. リバプール，ニューカースル，グラスゴー）と密接に結びついていることを挙げている。eWAVEにはyous(e) とその変異形の用例は合わせて10点掲載されているが，その多くがアイルランド移民や彼らが影響を与えたブリテン諸島内の地域からの入植者の英語を基盤に持つL1の英語変種のものである点は示唆に富む。ブリテン諸島の変種（ア

イルランド英語に加えて，イングランドの北部方言，ウェールズ英語，スコットランド英語）や先述のニューファンドランド英語，南半球の変種（オーストラリア英語，フォークランド諸島英語，ジンバブエ白人英語）の用例が掲載されている。一般的に南半球の英語は多くの共通点を持つと言われているが（e.g. 母音の後の r が発音されない（non-rhotic）），クレオールに分類されているパーマストン島（ニュージーランド領クック諸島の一つ）で話されている変種や土着の言語の影響が様々な領域で指摘されているアボリジナル英語（high-contact L1）で見られる用例については，アイルランド由来の用法にまで遡れるかどうか特に慎重に検証する必要があるだろう[22]。各変種における yous（e）の起源を突き止めることはどうやら一筋縄ではいかないようである。Clarke（2010：89）は，ニューファンドランドでアイルランド系移民の末裔が話す英語変種の yous（e）について，ブリテン諸島からもたらされたものか，類推により名詞の複数語尾である -s を you（単数）に付加して独自に発達させたものなのかはっきりしないと述べている[23]。また，Hickey（2003：360）は，南アフリカではアイルランドからの入植者が少数であったことを指摘し，南アフリカ英語の yous（e）は，２人称の単複を区別するアフリカーンス語の影響を受けながら独自に発達した可能性があることを示唆している。

次に，you all について考えていきたい。you all という２人称複数形は，伝統的にはアメリカ南部方言の特徴として言及されることが多い（e.g. 寺澤 2008：125）。しかし，eWAVE を利用して you all の用例が報告されている英語変種の地理的な分布と各変種の歴史を調べると，アメリカ南部方言とはおそらく無関係に you all という形態が多くの英語変種で発生している可能性を認識することになるだろう。you all は世界英語に広く見られる形態的特徴の一つと見ることができるかもしれない。eWAVE には you all とその関連形（e.g. y'all, yall）の用例が15点提供されている。アメリカ南部方言との強い繋がりを連想させる英語変種（e.g. ガラ語，初期の AAVE,

リベリア入植者英語（Liberian Settler English））から用例が報告されている一方で，アジアやアフリカにおける indigenized L2 の諸変種（インド英語，パキスタン英語，スリランカ英語，マレーシア英語，インド系南アフリカ英語）やカリブ海・太平洋地域のクレオール（バハミアン・クレオール，トリニダディアン・クレオール，ヴィンセンシャン・クレオール，パーマストン英語）にも普及していることが見て取れる。indigenized L2 やピジン・クレオールに分類される一部の英語変種では，名詞に all を付加して複数を標示する用法が発達しており，その延長線上で you all が発達したと考えられている（e.g. インド系南アフリカ英語）[24]。

you guys も同様にアメリカ英語の特徴として一般的に認知されているが[25]，9 点の用例を見ると，このような 2 人称複数形が世界英語に共通する形態的特徴である可能性に気がつくだろう。この形態は世界の様々な地域に分布しており，ブリテン諸島（チャネル・アイランズ英語），北米大陸（ニューファンドランド英語），アフリカ（ガーナ英語，ケニア英語，南アフリカ白人英語），アジア（パキスタン英語，シンガポール英語），太平洋地域（オーストラリア英語，ハワイ・クレオール[26]）に見られる。変種のタイプも様々である。

最後に，ピジンやクレオールに特徴的な 2 人称複数形に言及したい。西アフリカやカリブ海の英語変種においては，unu（ジャマイカ英語，ジャマイカン・クレオール，サン・アンドレス・クレオール，スラナン，ベリジアン・クレオール），una（ナイジェリアン・ピジン，クリオ（シエラレオーネ・クレオール）），wuna（カメルーン・ピジン），wunna（バルバディアン・クレオール（バジャン））等，標準英語の話者や学習者には起源の見当がつかないような形態が報告されている。類似したこれらの形態が西アフリカやカリブ海地域に見られるという事実は何を示唆しているのだろうか。これら二つの地域を繋ぐキーワードは奴隷貿易である。カリブ海地域にはプランテーションの労働力として西アフリカから多くの黒人奴

隷がもたらされた。これらの大西洋地域で発達したクレオールは西アフリカの言語を基層言語（substrate）として持ち，多くの共通点が見られることから，大西洋クレオール（Atlantic creoles）という総称で呼ばれることもある（Hickey 2014: 38）。2 人称複数形の unu やその関連形の起源は，西アフリカの言語（おそらくイボ語）の 2 人称複数形である unu に遡るという（Hickey 2003: 359; Hickey 2014: 253）。大西洋クレオールに見られる unu 関連形は，areoversal（地理的に近く分布している諸変種に共通して見られる特徴）の好例といえよう[27]。

3.5　2 人称複数形の未来

世界英語のヴァナキュラーにおいて，多様な 2 人称複数形が存在することを見てきた。ここで，2 人称複数形の未来について考察したい。現在，英語は遠心力と求心力という相反する力が作用する複雑な力学の中に置かれている。各地域で独自のアイデンティティを英語に担わせて独特な変種を発達させようという力（遠心力）が作用している一方で，全世界で通用する最大公約数的な世界標準英語へと収斂させようという力（求心力）が同時に働いている（堀田 2011: 180–183）。ここまで見てきたような多様な 2 人称複数形の中には，遠心力の作用によって脱標準化が進み誕生した形態と解釈できるものもあるだろう。しかし，このようなヴァナキュラーのレベルでの革新が，これから世界的な標準変種に影響を与える可能性は否定できない。Kortmann（2021: 312）は，eWAVE に収録されている形態統語的な現象のうち将来的に標準変種にも取り入れられる可能性がある項目について議論する中で，明示的な 2 人称複数形の再導入（reintroduction）を有力な候補の一つとして挙げている。世界規模で見られ，傷痕（stigma）が伴わないことがその理由の一つである（cf. 多重否定（multiple negation））。また，寺澤（2008: 125–126）は，you all（y'all），you people，you folks，youse，you-uns 等の 2 人称複数形に言及し，いずれかの表現

が将来的に標準変種に取り入れられる可能性は十分にあると述べている。

将来的にどの形態にそのような見込みがあるのだろうか。eWAVE の情報に基づき，英語変種の種類に着目しながら考えたい。Kortmann（2020: 651）は，話し言葉の世界標準英語（global spontaneous spoken standard English）に与えうる世界各地の英語変種の影響について論じているが，high-contact L1 と indigenized L2 がこれから特に強い影響力を行使するのではないかと述べている。とりわけ high-contact L1 に分類されているアメリカ英語は，威信（prestige）が与えられており，今後も影響力をますます強めていくと考えられる。eWAVE の用例一覧には high-contact L1 と indigenized L2 の用例が34例含まれているが，この中に世界標準英語入りを果たす本命を見出すことができるかもしれない。最も用例数が多いのは，you all（9 例）であり，you guys（7 例），yous(e)（6 例），you people（5 例）が続く[28]。これは，アメリカ英語との強い結びつきにも後押しされながら，you all や you guys が世界標準英語の人称代名詞体系に加わる可能性が高いことを示唆する論拠の一つといえるかもしれない。また，3.4節で見たように，これらの形態が地域や変種の種類にかかわらず世界英語で広く観察されているという事実も世界標準英語への参入を促す可能性がある。

また，先行研究を参照してヴァナキュラーにおける最近の傾向を調べると，今後の展望についての更なるヒントが得られるかもしれない。you all と you guys の二者の間では，後者の支持率が高まってきているようである。アメリカ英語では，都市部において，南部方言を喚起させる you all よりも you guys が好まれる傾向が見られるという（Garner 2016: 978）。アメリカ英語の影響によるものかどうかは議論の余地があるが，traditional L1 の変種にも you guys が侵食を始めている。yous(e) の起源とされているアイルランド英語では，若者を中心に you guys の使用が浸透してきている（Filppula 2012: 33）。ニューファンドランド英語においても同様の

変化が起こっており，伝統的に ye が複数形として使われてきたアイルランドの影響が強い地域においても，you guys が若者の間で広まってきている（Clarke 2010: 88–89）。eWAVE が提供するニューファンドランド英語の用例２点（yous と you guys）を見ることによっても，この地域には伝統的な形態と新興の形態が共存していることを窺い知ることができる。

２人称複数形の現在の動向については，NOW（News on the Web）Corpus や The Corpus of Global Web-Based English（GloWbE）等，世界英語を収録したコーパスを用いることでより詳しい洞察が得られると思われるが，紙幅の関係で別の機会に譲りたい[29]。

４．おわりに

本稿では，世界英語の形態統語的な現象について豊富な情報を提供するデータベースである eWAVE を活用し，その学術的な価値と問題点について論じながら，世界英語に見られる２人称代名詞について考察してきた。それぞれの変種について専門的な知識のない eWAVE の利用者の立場から疑問点や気づきを整理し，情報が不十分な場合は，先行研究に言及しながら考察を加えた。eWAVE の情報を複合的な視点から読み解くことで，世界英語の多様性とその起源，今後の展望について英語史の視点から掘り下げて思考することができるということを示した。

eWAVE は世界英語の大まかな動向を掴むという点においては非常に有用であるが，eWAVE の情報のみでは解決できない問題が存在することも指摘した。同じ形態が地理的に隔てられた二つの変種に分布している場合に，それが変種間の歴史的な連続性に起因するものなのか，各地で同じようなメカニズムが働き独自に発達したものと見るべきなのか，あるいはこれらの要因が複雑に組み合わさって形成されてきたものなのか，このような問いには eWAVE は答えてくれない。このような問題の解決は利用者の

手に委ねられる。各変種についての歴史社会言語学的な知識を前提に，実証的な証拠に基づき慎重に議論することが求められるだろう。

筆者は，主体的な学びの過程で英語史的な思考法を養うことができるという教育的な効果に注目し，英語史の講義に eWAVE を導入している。eWAVE は，「過去志向」であると思われがちな英語史の講義に，「現代志向」，「未来志向」のアクティブラーニングの要素を取り入れ，学生の興味関心を引き出すのに最適なツールであるという手応えを学生の反応（レポート等の提出物）から感じている。コロナ禍により授業の在り方が見直されている時代だからこそ，オンライン授業においても活用できる eWAVE の積極的な導入を薦めたい。

注

1　以下，本稿では所有格については扱わない。伝統的な単数の所有格は thy（古英語 þīn）という形態であったが，thou，thee と共に衰退していった。

2　初期近代英語期の 2 人称単数代名詞の使用状況に関する先行研究は Nakayama（2018：18–19）に詳しくまとめられている。後期近代英語期（1700–1900）における 2 人称代名詞を調査した最近の研究には，18世紀の戯曲を調査した Nonomiya（2021），19世紀の小説を対象とした Nakayama（2018）などがある。

3　初期近代英語期の you と ye の交替については Barber（1997：148–149）に詳しい。

4　世界で広く読まれている英語史の古典的名著である Baugh and Cable（2013）では，2 人称代名詞の歴史的な変遷は初期近代英語期を扱った章 ‘The Renaissance 1500–1650’ で扱われているのみで，後期近代英語以降の使用状況や世界英語については触れられていない。2 人称代名詞体系の現状について世界英語にも目配りをしながら説明している近年の英語史の概説書には Gramley（2019）がある。

5　ブリテン諸島内のヴァナキュラーにおける 2 人称代名詞については Beal（2010：39–42）を参照。

6　より専門的な議論は Wales（2004）や Hickey（2003）を参照。

7　日本語で書かれた英語の（脱）標準化に関する最新の議論については，英語史における「標準化サイクル」という仮説の妥当性を批判的に検討した堀田（2022）と20世紀以降の標準化を巡る諸問題を議論した寺澤（2022）を参照されたい。

8　アイルランド英語における 2 人称代名詞については Hickey（2003；2007）を参照。

9　3.3節で明らかになるように，単数に ye が使われる事例も存在する。

10　現時点では評価と変種の種類を組み合わせた絞り込み（e.g. A 評価の traditional L1）はできないようである。

11　eWAVE で attestation rate が上位の項目については Kortmann（2020）を参照。Kortmann（2020）は英語変種の種類や地域という切り口からも議論している。

12　後者のような独自路線の発達は‘parallel independent development’と呼ばれる（Hickey 2014: 231）。

13　Clarke（2010: 89）は，ニューファンドランドのアイルランド移民の影響が強い地域では，単数形として弱形の ya /jə/が使われると説明しているが，ye という弱形があるかどうかについては言及していない。Hickey（2007: 408）は，単複の区別はしていないものの，ニューファンドランドの ye はアイルランド英語に由来するものかもしれないと述べている。

14　ガラ語の ye の用例には，単複共に使われる you の変異形であるという注が加えられている。

15　用例には “different vowel length: longer in object” という注が加えられており，yuu が使われるのは目的語の機能であることが示唆されている。

16　Hickey（2014: 20）を参照。

17　ブリテン諸島からもたらされた弱形の ye が受け継がれているという可能性もあるだろう。

18　WAVE においても人称代名詞の発音に関する情報は限られている。アイルランド英語の単数の ye に言及する際，Filppula（2012: 33）は伝統的な ye /jiː/と弱形の ye /jə/を区別しておらず，単に you の代わりに使われることがあると説明している。

19　本格的な調査を行う場合は，Nakayama（2018）が提示した ye の分類基準が重要であろう。Nakayama（2018）は，古英語から連綿と受け継がれた伝統的な ye（old ye）と you の弱形の ye（recent ye）を区別することの重要性を説き，19世紀の小説に見られる用例を質的に分析しながら，二者を区別する際に有用な基準を提示している（e.g. old ye は動詞の前で主語として（pre verbal），recent ye は動詞の後で（post verbal）使われる傾向）。

20　u は 2 人称のみならず 1 人称複数形としても使われるという（Migge 2012: 281）。

21　*OED Online* は初出例として1835年 2 月11日の *Dublin Penny Journal* を引用している。

22　アボリジナル英語の概要については Hickey（2014: 10–11）を参照。

23　ニューファンドランド英語には，yiz という形態も見られるが，これはアイルランドからの移民がもたらしたものであると考える向きもある（Wales 2004）。

24　詳しい議論については，Hickey（2003: 361–363）を参照。

25　Hickey（2014: 253）は，you guys について，アメリカ英語で普遍的に見られ，そこから拡散している用法であると述べている。また，通常は性別関係なく若者を指示する表現であると説明している。

26　ハワイ・クレオールの用例は yu gaiz という形態を示している（付録の表 2 を参照）。

27　areoversal や varioversal（類似した歴史社会言語学的背景を持つ諸変種に頻出する特徴）等の世界英語の類型論的分析に用いる専門用語については，Szmrecsanyi and Kortmann（2009：33–34）を参照。

28　異綴の変異形も含んで計算している。

29　世界英語における 2 人称複数形の多様性に焦点を当てたコーパスに基づく実証的な研究には，GloWbE を用いて20の英語変種における 2 人称複数形を調査した Galiano（2022）がある。

参考文献

Barber, Charles. 1997. *Early Modern English*. Revised ed. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Baugh, Albert C., and Thomas Cable. 2013. *A History of the English Language*. 6th ed. London: Routledge.

Beal, Joan C. 2010. *An Introduction to Regional Englishes: Dialect Variation in England.* Edinburgh: Edinburgh University Press.

Clarke, Sandra. 2010. *Newfoundland and Labrador English.* Edinburgh: Edinburgh University Press.

Filppula, Markku. 2012. “Irish English.” In Bernd Kortmann and Kerstin Lunkenheimer, eds. *The Mouton World Atlas of Variation in English.* Berlin: Mouton de Gruyter. 30–47.

Filppula, Markku, Juhani Klemola, and Devyani Sharma, eds. 2017. *The Oxford Handbook of World Englishes.* New York: Oxford University Press.

Galiano, Liviana. 2022. *Second Person Plural Forms in World Englishes: A Corpus-Based Study.* Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.

Garner, Bryan A. 2016. *Garner’s Modern English Usage.* Oxford: Oxford University Press.

Gramley, Stephan. 2019. *The History of English: An Introduction.* 2nd ed. London: Routledge.

Hickey, Raymond. 2003. “Rectifying a Standard Deficiency: Second-Person Pronominal Distinction in Varieties of English.” In Irma Taavitsainen and Andreas H. Jucker, eds. *Diachronic Perspectives on Address Term Systems.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 345–374.

Hickey, Raymond. 2007. *Irish English: History and Present-Day Forms.* Cambridge: Cambridge University Press.

Hickey, Raymond. 2014. *A Dictionary of Varieties of English.* Chichester: Wiley Blackwell.

Kirkpatrick, Andy, ed. 2021. *The Routledge Handbook of World Englishes.* 2nd ed. London: Routledge.

Kortmann, Bernd. 2020. “Global Variation in the Anglophone World.” In Bas Aarts, Jill Bowie, and Gergana Popova, eds. *The Oxford Handbook of English Grammar.* Oxford: Oxford University Press. 630–653.

Kortmann, Bernd. 2021. “Syntactic Variation in English: A Global Perspective.” In Bas Aarts, April McMahon, and Lars Hinrichs, eds. *The Handbook of English Linguistics.* 2 nd ed. Hoboken, NJ: Wiley Blackwell. 299–322.

Kortmann, Bernd, and Kerstin Lunkenheimer, eds. 2012. *The Mouton World Atlas of Variation in English.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Kortmann, Bernd, Kersin Lunkenheimer, and Katharina Ehret, eds. 2020. *The Electronic World Atlas of Varieties of English.* Zenodo. DOI: 10.5281/zenodo.3712132. Available online at http://ewave-atlas.org（Accessed on 15 August 2022）.

Krauthamer, Helene Seltzer. 2021. *The Great Pronoun Shift: The Big Impact of Little Parts of Speech.* New York: Routledge.

Migge, Bettina. 2012. “The Eastern Maroon Creoles.” In Bernd Kortmann and Kerstin Lunkenheimer, eds. *The Mouton World Atlas of Variation in English.* Berlin: Mouton de Gruyter. 279–290.

Nakayama, Masami. 2018. *Grammatical Variation of Pronouns in Nineteenth-Century English Novels.* Tokyo: Hituzi Syobo.

Nelson, Cecil, Zoya Proshina, Daniel R Davis, Braj B Kachru, and Yamuna Kachru, eds. 2020. *The Handbook of World Englishes.* Hoboken: Wiley-Blackwell.

Nonomiya, Ayumi. 2021. *Enregisterment of* Thou *in Eighteenth-Century Plays.* Tokyo: Kaitakusha.

OED Online. Oxford University Press. Available online at https://www.oed.com（Accessed on 15 August 2022）.

Smith, Jennifer. 2012. “Scottish English and Varieties of Scots.” In Bernd Kortmann and Kerstin Lunkenheimer, eds. *The Mouton World Atlas of Variation in English.* Berlin: Mouton de Gruyter. 21–29.

Szmrecsanyi, Benedikt, and Bernd Kortmann. 2009. “Vernacular Universals and Angloversals in a Typological Perspective.” In Markku Filppula, Juhani Klemola, and Heli Paulasto, eds. *Vernacular Universals and Language Contacts: Evidence from Varieties of English and Beyond.* New York: Routledge. 33–53.

Trudgill, Peter. 1999. *The Dialects of England.* 2nd edition. Oxford: Blackwell.

Wales, Katie. 2004. “Second Person Pronouns in Contemporary English; the End of a Story or Just the Beginning?” *Franco-British Studies* 33: 172–185.

唐澤一友．2016.『世界の英語ができるまで』亜紀書房．

寺澤盾．2008.『英語の歴史―過去から未来への物語』中公新書．

寺澤盾．2022.「英語標準化の諸相–20世紀以降を中心に」高田博行・田中牧郎・堀田

隆一（編）『言語の標準化を考える―日中英独仏「対照言語史」の試み』（大修館書店）. 129–148.
堀田隆一. 2011.『英語史で解きほぐす英語の誤解―納得して英語を学ぶために』中央大学出版部.
堀田隆一. 2022.「英語史における「標準化サイクル」」高田博行・田中牧郎・堀田　隆一（編）『言語の標準化を考える―日中英独仏「対照言語史」の試み』（大修館書店）. 106–128.

付録

表１．eWAVE における F35（you 以外の２人称単数形）の用例

ID	用例	変種	変種の種類
811	*Yu and yuu*	Norfolk Island/ Pitcairn English	English-based Pidgins
979	*thee/thou (SUBJ) / thee (OBJ)*	Welsh English	High-contact L1 varieties
980	*thee (SUBJ/OBJ) / yee (SUBJ)*	Welsh English	High-contact L1 varieties
1169	*Put un where ye can see 'im*	English dialects in the Southwest of England	Traditional L1 varieties
1244	*I tell ye hit aint right what I seen.*	Earlier African American Vernacular English	High-contact L1 varieties
1565	*I n? a baafu wata moo.*	Eastern Maroon Creole	English-based Creoles
1566	*Pe i e [ye] go uku, na ape?*	Eastern Maroon Creole	English-based Creoles
1567	*Na yu abi bigi ain fu mi.*	Eastern Maroon Creole	English-based Creoles
1997	*That's when most of them want thee*	English dialects in the North of England	Traditional L1 varieties
2056	*"Father" he said "what ye tryin to do?"*	Newfoundland English	Traditional L1 varieties
2164	*ye*	Gullah	English-based Creoles
3963	*Sure it's no good to ye in England*	Irish English	High-contact L1 varieties
4022	*Div ee ken this quine?*	Scottish English	Traditional L1 varieties
4023	*Du's here, du's alive!*	Scottish English	Traditional L1 varieties
4091	*Du/thoo*	Orkney and Shetland English	Traditional L1 varieties

表２．eWAVE における F34（you 以外の２人称複数形）の用例

ID	用例	変種	変種の種類
11	*What yous playing?*	Palmerston English	English-based Creoles
12	*You lot playing ping pong?*	Palmerston English	English-based Creoles
13	*You all'll get one.*	Palmerston English	English-based Creoles
102	*wuna*	Cameroon Pidgin	English-based Pidgins
175	*I'll meet you all at the Cheras toll.*	Malaysian English	Indigenized L2 varieties

347	*Where are you together?*	East Anglian English	Traditional L1 varieties
348	*Come you on together*	East Anglian English	Traditional L1 varieties
424	*You guys can come if you want to.*	Channel Islands English	High-contact L1 varieties
501	*Wunna in see de tiicher waitin fo wunna to stop taakin?*	Barbadian Creole（Bajan）	English-based Creoles
595	*Ùnà sí ùnà pìkín.*	Nigerian Pidgin	English-based Pidgins
676	*Are you playing this afternoon, you guys?*	Kenyan English	Indigenized L2 varieties
745	*Y'all keep on dancing.*	Sri Lankan English	Indigenized L2 varieties
810	*Yorlye come look ortn.*	Norfolk Island/ Pitcairn English	English-based Pidgins
897	*you-all / yall*	Indian English	Indigenized L2 varieties
978	*All youse lot come with me the rest of you stay where youse is.*	Welsh English	High-contact L1 varieties
1168	*sell that to you people*	English dialects in the Southwest of England	Traditional L1 varieties
1243	*You all try to live like young people ought to live.*	Earlier African American Vernacular English	High-contact L1 varieties
1364	*Yinna two bitches come here!*	Bahamian Creole	English-based Creoles
1365	*I like to talk to please you-all, but not to please myself.*	Bahamian Creole	English-based Creoles
1470	*hu unu me go da trip fu?*	Belizean Creole	English-based Creoles
1471	*Sum a unu bayz ga ova de.*	Belizean Creole	English-based Creoles
1564	*U o kon na a dede osu?*	Eastern Maroon Creole	English-based Creoles
1640	*aayo/aalyo/yaal*	Vincentian Creole	English-based Creoles
1812	*yu gaiz*	Hawai'i Creole	English-based Creoles
1906	*Come here, you ones! Clear out, you all!*	Manx English	High-contact L1 varieties
1907	*ye'll never get to the westhard of yandher falla*	Manx English	High-contact L1 varieties
1908	*why didn' yer move to the man, yer big toot, yer?*	Manx English	High-contact L1 varieties
1909	*Is it stitchin and sawin [sewing] ye're callin that?*	Manx English	High-contact L1 varieties
1996	*We can't let yous all in*	English dialects in the North of England	Traditional L1 varieties
2054	*witches, any witches in(gap 'place name') that you guys know or anybody that ye calls witches or?*	Newfoundland English	Traditional L1 varieties
2055	*"when yous comes back" he said*	Newfoundland English	Traditional L1 varieties
2163	*yall*	Gullah	English-based Creoles
2219	*Hey y'all two, leave me alone*	Chicano English	Indigenized L2 varieties
2255	*Unu come.*	Jamaican English	Indigenized L2 varieties
2343	*aal mi want unu gi mi*	Jamaican Creole	English-based Creoles

2453	*unu*	San Andrés Creole	English-based Creoles
2580	*unu*	Sranan	English-based Creoles
2645	*Let me ask you all something*	Trinidadian Creole	English-based Creoles
2646	*What time all you leave yesterday?*	Trinidadian Creole	English-based Creoles
2768	*Una*	Krio（Sierra Leone Creole）	English-based Creoles
2830	*That's why yall so wild now, yall hearing too much thing.*	Liberian Settler English	High-contact L1 varieties
2925	*When yall stupid, I not stupid.*	Vernacular Liberian English	English-based Pidgins
3024	*They would have jumped at you guys the least opportunity they got.*	Ghanaian English	Indigenized L2 varieties
3025	*This man is going to kill you people.*	Ghanaian English	Indigenized L2 varieties
3087	*You people have to be very careful.*	Nigerian English	Indigenized L2 varieties
3135	*You people should start washing the dishes now.*	Cameroon English	Indigenized L2 varieties
3222	*Youse guys*	White Zimbabwean English	High-contact L1 varieties
3287	*You people*	Black South African English	Indigenized L2 varieties
3387	*Where are you guys?*	White South African English	High-contact L1 varieties
3432	*Except it didn't quite work: get real, Zardari was told, we'll help you guys out when you guys get serious about reforms.*	Pakistani English	Indigenized L2 varieties
3433	*Shabbir began, "You people make fun of me because I don't know how to look and behave in a modern way. But you don't know that I don't lag behind when it comes to knowledge and wisdom and I will show you all what I am capable of in the upcoming quiz competition!"*	Pakistani English	Indigenized L2 varieties
3499	*Y'all must come and visit when y'all get a chance.*	Indian South African English	Indigenized L2 varieties
3580	*So you guys know or not?*	Colloquial Singapore English（Singlish）	High-contact L1 varieties
3623	*I could see youse talkin' to him*	Australian English	High-contact L1 varieties
3624	*so how long have you guys been married?*	Australian English	High-contact L1 varieties
3700	*ì no bi ju pipo gò kil àm?*	Ghanaian Pidgin	English-based Pidgins
3757	*when they saw youse in the airport*	Falkland Islands English	High-contact L1 varieties
3827	*Hey yas all home, are yas?*	Aboriginal English	High-contact L1 varieties
3828	*Do youse...want to come to the pools?*	Aboriginal English	High-contact L1 varieties
3829	*Yupala shut up first*	Aboriginal English	High-contact L1 varieties
3830	*Youfella bin bring dem cake*	Aboriginal English	High-contact L1 varieties
3962	*I know youse all*	Irish English	High-contact L1 varieties

4020	*Yous are wrang!*	Scottish English	Traditional L1 varieties
4021	*I na think you ains were there when we came to the Sloch.*	Scottish English	Traditional L1 varieties
4136	*He bin coming to teach you mob!*	Croker Island English	High-contact L1 varieties